

## Ⅱ 幼児期における寛容の心の育成

### 1 幼児にとっての寛容の心とは

幼児にとって幼稚園やこども園・保育所における生活は、初めての集団生活の場である。教師との信頼関係を基盤に徐々に自分の居場所を確保し、安心してやりたいことに取り組むようになる。入園前まで保護者と過ごすことが多かった幼児も幼稚園生活では同年齢の幼児と過ごすようになり言葉を交わしたり、物のやり取りなどの関わりが生じたりする。その関わりの中で様々な自己主張のぶつかり合いによる葛藤と一緒に生活する楽しさを味わう。このような関わりの中で幼児は自分の思ったことを相手に伝え、また、相手の思っていることに気付くようになり、自己を調整しながら幼児同士の関わりを深めていく。幼児にとっての寛容な心はそうした集団生活を通して自分と他者の違いに気付いていく体験によって育まれていくと考える。

### 2 幼児が自他の違いに気付く過程

幼稚園教育要領における人との関わりに関する領域「人間関係」では、内容（6）に「自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。」内容（7）に「友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。」内容（10）では「友達とのかかわりを深め、思いやりをもつ。」と記載されており、「自分と異なる様々な個性をもった友達と接する」「他者の気持ち」への気付きについて言及している。

幼稚園は様々な人々と出会う場であり、他者との関わりの中で、他者の気持ちや自他の行動の結果などに気付くようになる。この気付きは以下の人との関わる過程の中で幼児の姿に質的变化が見られる。

- ① 一人一人の子供の安定 → 自分の思いを出して遊ぶ  
↓
- ② 安心して遊べるようになると 周りに興味をもつようになる  
↓
- ③ 自分を出して動き、周りの 友達と触れ合う楽しさを感じるようになる  
↓・「同質」であることに価値を見出し「異質」と感じるものを排除する心理
- ④ 互いに自分を出して動き、友達と関わって遊ぶ楽しさを味わうようになる
  - ・ ぶつかり合いの体験（相手の思いに気付く）
  - ↓
  - ・ 折り合って遊ぶ体験
  - ↓
  - ・ 互いを受け止め、受け入れて遊ぶ体験
- ⑤ 互いのよさを受け止め協力して遊びを進めていく楽しさを味わう

様々な感情体験

### 3 事例

集団生活の中で自他の違いに気付く機会を見過ごさずに、友達には自分と異なる思いや考えがあることに気付かせるようにする必要がある。ここでは、具体的にどのような指導が必要なのか、寛容な心の芽と思える場面を捉え指導のポイントを示したい。

#### 事例1 おもちゃをとられた！（3歳児入園当初）

A児が泣いていた。教師はその訳を聞くと「あの子(B児)が僕の電車をとった」と言う。A児にとっては自分が使っていた電車であったので勝手に持っていかれたことに怒っていた。教師は「Aちゃんの電車だったんだね。Aちゃんが楽しそうに遊んでいたからBちゃんも電車が欲しかったんだね」とA児とB児に言う。互いの気持ちを代弁することでA児にはB児の思い、B児にはA児の思いに気付かせている。その後、欲しいときは「貸して」と言うこと、貸してあげてもよいときは「いいよ」と言うことを伝えた。

入園当初は幼児にとって安定して時間を過ごすことができるよう、家庭で慣れ親しんだ遊具を用意している。人気のある遊具は数を十分に用意しているが、近くで同じものをもって遊んでいる他児の遊具を黙って取ってしまうことが多い。初めての集団生活であるので遊具などは皆のものの意識が薄いためこのようなトラブルが起こることが多い。A児は使いたかったB児の気持ちに気づき、B児はA児が遊具を取られ泣いた気持ちに気付く経験をする。このような入園当初の幼児同士の関わりが寛容の心を育む芽となると考える。

#### 事例2 やっぱり僕もふいて！（3歳児7月）

初めての水遊び。ワクワクする幼児が多い中、初めてのことに不安顔の幼児も少なくない。水遊びへの支度の手順を紙芝居風にして知らせた。どの子も楽しんで遊び着替えの時に教師は「タオルで体を拭きましょう。自分でできるかな？」と声をかけた。教師は、自分ですることを促しているが十分に拭けていない幼児の頭を自分の膝の上にすわらせてふいていた。それをそばで見ていたC児に教師は「Cちゃんもふいてあげるよ」というとC児は「いいの、自分でするの」と言う。教師は「自分でできるんだね」と言って認め、他の幼児の頭を拭いていた。その後教師が他児の頭を拭き終わるとC児はサッと教師の膝にすわり「やっぱり僕も拭いて」と言って拭いてもらった。嬉しそうだった。

依存から自立に向かう幼児である。入園当初から自分でできる経験を増やしていく指導をしていく。しかし、個人差が大きいこの時期、どの子もみんな自分でできるとは限らない。教師は自分でしましょうと皆に言うが、本事例のように自分でできなくてもまた甘えたい時は助けてくれることを知る。このように生活行動のきまりは全員に徹底をはかるように指導するが一人一人の発達やその時の状況によって受け止め方は様々である。

### 事例3 同じだね！（4歳児6月頃）

幼稚園に慣れてくると、自分を出して遊ぶようになる。ある日の弁当時にD児が自分の弁当の中身を見ながら「卵持ってきた人、手を挙げて」と言う。すると、それを聞いた他児たちが自分の弁当を見て卵が入っているのを確認すると元気よく手を挙げる。手をあげた者同士が互いに顔を合わせニコリする。それを見聞きした他児が次々に「ウインナー持ってきた人、手を挙げて」「いちご持ってきた人」などと言い出す。

### 事例4 スカートはいてないから入れてあげない！（4歳児6月頃）

この頃は友達への関心が強くなり、同じ場で遊ぶ他児と関わりを持ち、一緒に行動したい2～3人の友達が出来はじめる。E児、F児、G児の3人はスカートをはき、頭にはカールの髪がついている面ベルト、手にはくるくる棒で作った魔法の棒を持っている。プリキュアになったつもりで同じ動きをしている。H児がそれを見て「入れて」と言う。すると、E児が「スカートはいてないから入れてあげない」と言う。

事例3は同じ食べ物を持ってきた友達とのつながりを楽しむ姿であり、「同質」であることに価値を見出す姿である。事例4は同じ格好をしていないから仲間に入れてあげないという「異質」であることに対して反応し、それを排除する事例である。両事例とも集団への帰属の喜びを味わっているが、行き過ぎると「異質」なものを排除する心理につながりやすい。このような姿はこの発達時期にどこの幼稚園でも出会う姿である。「自分と異なるものは受け入れない」という土壌が育たないように、一人一人の遊びの様子や育ちを認めていきながら、次第に一人一人によさがあり、違っていることが当たり前であり、それを受け入れ尊重されるべき存在であることを理解できるようにしていくことが大切である。

### 事例5 わたしと遊ぶと言ったじゃない！（5歳児6月）

I児は登園すると、すでに登園し友達と遊んでいるJ児のそばへ行き「どうして、他の子と遊んでいるのよ。昨日帰るとき、明日一緒に私と遊ぼうと言ったのに」と怒った顔をして訴えている。J児はI児の剣幕に驚いていたが「Iちゃんも一緒に遊ぼうよ」とI児を遊んでいた遊びに誘う。I児は「私だけと一緒に遊ぼうと約束したのに」と言って納得できない顔を見せる。J児は困った顔をしている。

I児はJ児と二人きりで遊びたいがために他児と一緒に遊びに入ることを排除したい気持ちをもっている。この頃になると遊びのメンバーがほぼ安定してくると他を排除することで集団の凝集性を高めようとする。また、一見仲良く遊んでいると安心しがちであるが力関係の固定化が起きやすい。自己を発揮しきれない幼児がいないか等、人との関わりと自己の発揮の仕方を見つめ、一人一人大切な存在であることを伝え続け、次第に違いを受け止め尊重し合う気持ちを育てていくことが大切である。

#### 事例6 2周走ればいいんだよ！（5歳児9月）

運動会が近づき、狭い園庭でリレー（円形）の練習をしていた。走る距離が短いのであつという間に勝負がついていた。するとK児が「つまんない」と言って勝手にやめて遊びから抜けようとする。すると、L児が「Kちゃんがやめたら人数が合わなくなるよ」とK児に向かって言う。K児が「だってすぐ終わっちゃうんだもん」と言うとM児が突然「じゃあさー、一人2周走ればいいよ。2周走ってバトンタッチしよう。どーお？」と提案する。文句を言っていたK児が「いいね、やってみよう」と受け入れ、自分の思いを変更し走り始めた。

リレーはトラックの周りを走るというルールに沿って行われるものであるという誰もが思っていたものである。2周走る遊び方はこれまで行われていなかったが、新しいルールが提案されたことによって折り合うことで楽しく遊ぶことができた。このように折り合って遊べるにはこれまでも様々な関係性の中で、自己主張と自己抑制の自己調整を繰り返しながら自己を主張するだけでなく、また自己を抑えるばかりでもなく、両者を調和させながら自己実現に向けて行動できるように援助していくことが望ましいと考える。そのためには、遊びの展開に関して考えを出し合えるよう、遊びの充実を図り、充実した遊びの中で、困難なことを乗り越え、やり遂げる充実感を味わえるようにすることが寛容な心を育む上で重要であるとする。

#### 4 事例から学ぶ

- 寛容の心は関係性の中で育つことを前提として考えると、幼児期は自己中心的な自己であり、寛容の心も少ない時期である。少ない中にその芽生えとなる姿が見られる。つまり、幼児期は寛容の心が育まれる萌芽期である。
- 芽生えを培うためには、関係性の中で、自己主張と自己抑制の自己調整を繰り返しながら両者を調和させながら自己実現に向けて行動できることが望ましい。
- 他者との違いを意識する自己を育てる。

4歳児は「同質」であることに価値を見出し、自他の違いを意識するようになり自分の思いを主張することの充実感と友達と遊ぶ楽しさを経験する。

5歳児は、他者と同一視した行動をとることと、異なる行動をとることと調整しながら自己が発達する。ここで配慮しなければならないことは、教師は他者との比較でその子らしさを認める援助を繰り返していると寛容な心は育たず、優越感や劣等意識が先にもたれるようになる。従って、他者を認めながらその子らしさが発揮できるような指導が大切である。

- 寛容の心の芽生えは遊びの中で培われる。

寛容の心は言ってみせるものではなく、幼児期は、遊びを通して他者とかかわり、泣いたり笑ったりなど共感したり、葛藤したりなどを体験し、他者と心を通じ合わせる

遊びの中で培われていく。従って、教師は遊びが充実するための援助に力をいれることは言うまでもない。

○幼児集団が育ち合うかかわりを考える。

関係性の中で育つものが寛容の心である。親和性のある幼児集団の育成は必須である。

## 5 次期幼稚園教育要領にむけて

次期幼稚園教育要領（平成30年度より実施）がまとめられた。5歳児修了時まで育てほしい姿や近年の子供の育ちをめぐる環境等を踏まえた教育内容の見直しが示された。

ここでは寛容の心に関する内容について取り上げる。

○「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」10項目が明示された。

ア 健康な心と体

イ 自立心

ウ 協同性

エ 道徳性・規範意識の芽生え

オ 社会生活との関わり

カ 思考力の芽生え

キ 自然との関わり・生命尊重

ク 数量・図形、標識や文字などへの関心・感覚

ケ 言葉による伝え合い

コ 豊かな感性と表現

○寛容の心を育む関係の内容は、「道徳性・規範意識の芽生え」の具体的な姿として『友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。』と示された。

○非認知的能力を育むことの重要性が指摘された。

『幼児期におけるいわゆる非認知的能力を育むことの重要性の指摘等を踏まえ、身近な大人との深い信頼関係に基づく関わりや安定した情緒の下で、例えば、親しみや思いやりを持って様々な人と接したり、自分の気持ちを調整したり、くじけずに自分でやり抜くようにしたり、前向きな見通しを持ったり、幼児が自分のよさや特徴に気づき、自信を持って行動したりするようにする。』